二〇二六年度

一般推薦入学試験【後期日程】
高卒認定、海外帰国生徒、高等学校卒業者、定時制・通信制高等学校入学試験【後期日程】
小論文

注意事項

一、試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かないこと。
二、この冊子は3ページある。
三、解答は、別紙の解答用紙を使用すること。試験中、別に配付した下書用紙の使用を認める。
四、下書用紙を使用した解答の提出は認められない。
五、本冊子に、脱落、印刷不明瞭がある場合は、本試験中に試験監督者に申し出ること。
六、解答には、黒鉛筆またはシャープペンシルを使用し、読みとれるよう記入すること。読みとれない場合は、採点できないことがある。
七、試験監督者による指示の後、解答用紙に受験番号・氏名を忘れず記入すること。また、その上部にある入学試験名のうち、受験する入学試験名に〇(マル)を付けること。
八、試験終了後、問題冊子、下書用紙は持ち帰ること。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

お互いさまの社会をめざして

いまわれわれは、先行きが見えにくい世の中にいて、将来、どこに向かってどう舵取りをすべきか、その方向性も定まらないままにいます。アメリカの経済学者ガルブレイスが『不確実性の時代（Age of Uncertainty）』を著したのは一九七七年でした。まさにいま、不確実な時代が再来したともいえます。先行きが見えにくいなかで、いま直面するさまざまな問題を投げ出すわけにはいきません。そこで、一体われわれはどのような社会をめざすべきなのか。本書を締めくくるにあたって、考えてみたいと思います。

いまの日本社会を特徴づける局面として、家族のあり方や人びとの生き方の変化があります。そして、その変化に制度が十分追いついていかないがゆえに、セイフティーネットからこぼれおちる人びとが増えています。かつての日本は皆婚社会ともよばれ、一定の年齢に達すると結婚して子どもをもうけ、人びとの基本的な生活保障を家族が提供してきました。しかし、いったん結婚しても一生添い遂げることが当然ではなくなり、生涯結婚しない者も増えて、さらにはきょうだい数の減少が親族規模を縮小しています。また、家族を持たない者も増えて、年老いたとき身の回りの世話をしてくれる家族の不在が孤独死へと直結しています。そのような人びとのつながりの欠如がいまの日本に見えます。

①家族がいるかいないかで、生活の質は大きく異なります。これは、日本型福祉社会とされた日本の生活保障制度が家族を基盤に形成されてきたことの結果ともいえます。しかし、家族のあり方や人びとの生き方が変わるいま、家族がないからといって大きく生活の質が低下することのないような社会力をつけなければなりません。この世に生を享けた赤ん坊の泣き声、子どもたちが遊ぶ声、何が面白いというわけでもなく群れる若者たちに、一人読書にふける者、帰路を急ぐサラリーマンたち、けんかする恋人たちに、顔をくしゃくしゃにして笑うお年寄りの顔、そんな光景を目の当たりにすると、将来、そんなに悪くないという気持ちになりますし、そうであればこそ、社会の問題をなおざりにするわけにはいかないのです。

人生の終わりを迎える際に、家族がいないことで孤独死を迎えなければならない社会は未熟といわざるをえません。これまで社会を担い、一人ひとりの人生がいまある社会をささえる力となってきたのですから、現役を退き引退したからといって世間から見放されるのは不条理です。これまで家族があることが前提とされ、家族が看取り、家族が墓を守ることが期待されてきました。しかし、その家族がないことが即、孤独な死へと直接つながるのは社会の弱さのあらわれです。共に生き、生活する場としてのコミュニティ作り、「お互いさま」の関係を

これまでの家族を超えたところで意識的に形成していかなくてはなりません。

たとえ家族がなくとも、われわれはつながっているのです。家族をもたないことで、生活の支えがゼロになることがないよう、家族に代わるつながりが必要だと思います。人はつながっています。それは意識するかしないかにかかわらず、事実なのです。例えば、子どもが小さくて働きに出ることがままならないとき、見えない他人にその母親は保険料をまかなってもらっています。しかし、やがて子どもが大きくなって働けるようになれば、彼女は自分も支えてもらったように子育てや家族の世話で働けない人たちの保険料をまかなう側になるのです。貧しい家庭の子の就学支援をみなで広く負担し、次なる世代を担う子どもたちを社会の一員として育て上げることで、将来高齢となったわれわれを支えてもくれます。

②実際に会ったり、触れたりすることができる人は限られていますが、見えない人にも支えられ、また支える関係があります。われわれのつながりは長い時間の中でお互いさまの関係を築いてきました。家族とは、いわばお互いさまの関係を血縁というつながりのもとで制度として埋め込んできました。それは親子、夫婦という続柄に付随する規範をもって、お互いさまの関係を保障するシステムともいえます。

自分の安全を自分だけで、あるいは家族だけで守るとするなら、何億もの財産をもって家のまわりに壁をめぐらすほかなくなるかもしれません。それでも、食べものが必要ですし、ゴミも捨てなくてはならないでしょう。外の世界を完全に遮断して、自分の安全だけを確保するなど到底できることではありません。自分が生きるうえの社会的リスクを、ただ一人だけ、あるいは一家族だけで小さくしようにも限界があります。社会的リスクとは人のつながりの中で、高くもなり低くもなります。お互いさまの関係とは、社会的リスクを最小限にすることに通じます。

人はみな、人それぞれの「ちから」があります。この「生きるちから」を決して過少評価すべきではありません。その意味で、一人ひとりの「ちから」を最大限に生かそうとする社会がこれからめざすべき一つの目標であり、一人ひとりのさまざまな力を信頼する社会がお互いさまの利益を最大限にする社会となります。

（白波瀬佐和子『生き方の不平等―お互いさまの社会に向けて』岩波新書二〇一〇）

問一　傍線①「家族がいるかいないかで、生活の質は大きく異なります」について、筆者の考えを文中の表現を活用して二〇〇字以内で説明してください。

問二　傍線②「実際に会ったり、触れたりすることができる人は限られていますが、見えない人にも支えられ、また支える関係があります」について、筆者の考えを文中の表現を活用して説明した上で、自分の体験を踏まえたあなたの考えを、合わせて六〇〇字以内で記述してください。